

島根大学における大学評価支援のためのデータベースシステムの構築

高清水直美†

島根大学評価室†

1. はじめに

島根大学では、外部評価、教員個人評価、学部の自己点検等、大学評価に対応した情報を収集・提供するため「島根大学評価情報データベース」を開発した。本稿では、データベースシステム構築の概要について述べる。

2. 大学評価の展開とシステム構築の経緯

大学評価とは、大学における教育研究等の質的向上を目的として、大学の活動状況を評価し改善するしくみである[1]。平成3年の大学設置基準の大綱化にともない努力義務として導入された大学の自己点検・評価制度は、その後の改正で義務化され、大学は教育研究を始めとする諸活動に関し自ら点検を行い、その結果について広く社会に公表することが義務づけられた。平成16年度からは認証評価制度が導入され、日本のすべての大学は国から認証を受けた評価機関による評価を定期的に受けることが義務化されることとなった。大学評価にあたっては、大学は組織運営に関する基礎データや教員の業績データ等、評価の根拠となるデータの定期的な提出が要求されることになり、教職員の負担増が大きな問題となった。さらに「自己点検・自己評価」および「認証機関による外部評価」に加え、島根大学では中期目標・中期計画に「教員の多面的評価」が定められており、このためのデータ収集の必要性も高まった。島根大学ではこの問題に対応するため、情報系の教員を中心として大学評価情報データベースシステム[2]を構築した。このシステムは、従来、部局あるいは個人に収集・保管が委ねられ大学内に散在していた情報資源を全学的に収集・管理し、社会的要請にもとづき広く学外に公表することにより、多面的な大学評価を支援するためのシステムである。

3. システムの概要

システムの概要を図1に示す。教員情報データベース（以下、教員情報DB）を中核として、組織データベース、各種の入出力および外部公開用サブシステム、学内外のデータベースとの連携機能から構成されている。

3. 1. システム開発の基本方針

システムを取り巻く状況を以下にまとめる。
(1) 学部および全学センターは18部局あり、その活動内容は様々である。(2) 建物は複数キャンパスと実習施設や農場など地理的に数ヶ所に点在している。(3) ITリテラシに不慣れな教員がいる。(4) 蓄積するデータは個人情報や秘匿情報を含み、また大学評価の材料となる重要なデータが含まれる。(5) 将来にわたり持続的にデータを収集する必要がある。(6) 大学評価は試行錯誤の段階であり、データ項目や機能の変更・追加・拡張が予想される。(7) 同じデータの重複入力という手間を省くため、学内外のデータベースと連携する必要がある。開発チームでは以上の状況を踏まえ、簡易なインターフェースであること、信頼性、保守性、拡張性、セキュリティの高いシステムであることを基本方針として開発することとした。当初、外部委託も検討されたが、大学の規模や財政状況等から、外部委託では費用対効果に見合ったシステム開発が期待できないこと、学内構成員の要望や、大学評価をとりまく状況の変化に柔軟に対応しなければならないことから、開発チームにより独自に開発することとなった。

3. 2. データ項目

教員情報DBのデータ項目は大別して「個人情報」「教育活動」「研究活動」「医療活動」「社会貢献」「管理運営」の6項目に分類され、この6項目は71の小項目から構成されている。データ項目は、大学評価・学位授与機構が定めるデータ項目を基本とし、各部局に追加データ項目を照会することで、分野による特殊性を考慮したものとなっている。これらのデータはリレーショナルデータベースのテーブル形式で格納されており、小項目がひとつのテーブルに対応している。システムのテーブル数は71、フィールド数は約400である。

3. 3. データの収集と利用

データは教員がウェブを経由して年度ごとに各自の業績を入力する(図2参照)。収集した業績データは、外部評価、教員個人評価、学部等における自己評価、活動状況の外部公開等目的別に加工され利用される。教員個人評価では、各教員が所属部局ごとに設けられた観点に基づ

き自己点検し、評価者に自己評価報告書を提出する。自己評価報告書には教員の活動の根拠を示す基礎資料を添付するが、その基礎資料として教員情報 DB から抽出したデータを用いている。自己評価の評価項目や評価の観点、部局ごとの専門性や特殊性が反映されたものとなっており、教員は自身の評価項目・観点に対応する根拠データをウェブ上で抽出し、印刷できるようになっている。

3. 4. データの公開

本学では、従来から全学の研究者総覧および学部毎の研究報告書やウェブサイトにて研究成果を公開してきた。しかしながら、データ入力状況にばらつきがあること、類似データベースが学内に混在しており、フォーマットも異なることから、入力に二度手間がかかることが問題となっていたため、新たな研究者総覧として登録が義務化されており安定した収集が可能な教員情報 DB のデータを利用することとした。教員情報 DB は汎用目的であり、個人情報や、自己点検のために用いる秘匿情報も含まれているため、公開範囲を限定した上で外部公開している。なお、業績レコードの入力画面には公開、非公開のラジオボタンを設け、ユーザがそれぞれの業績について公開可否を選択する。研究者総覧は、学部、研究者名、論文題目、論文キーワードで検索できるようになっている。また、セキュリティに配慮し、公開用サーバはデータ収集用サーバとは別に用意し、定期的に公開用データをアップデートしている。

4. 学内データベースとの連携

学内には大学評価情報データベースの他に人事データベース、シラバスデータベース、委員会管理データベース、外部資金データベース等のデータベースが存在している。大学評価においては、利用者が個々のデータベースに一つ一つアクセスして自己評価報告書を作成するのは非常に手間のかかる作業となる。そこで、図1に示すとおりが学内データベースと大学評価情報データベースの連携をはかっている。特に、島根大学学術情報リポジトリ[3]とはオンラインで相互に連携している。学術機関リポジトリは、大学や研究機関で生産された研究成果物を電子的な携帯で保存し、インターネット上に無償で公開することを目的とした電子アーカイブシステムであり、島根大学においても附属図書館により運営されている。教員情報 DB で研究業績データを登録あるいは更新する際に、リポジトリシステムを呼び出し、データを双方向に受け渡すことができる。

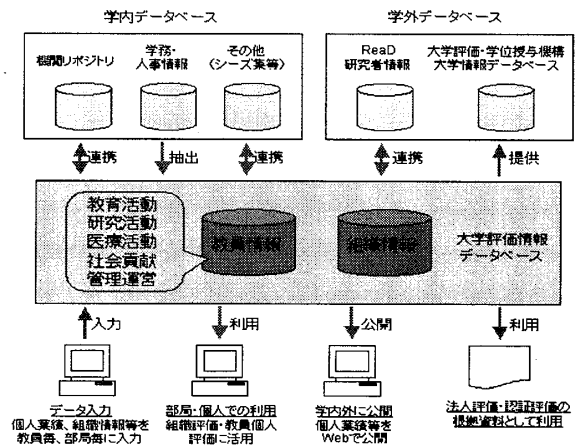


図1. 島根大学評価情報データベース概要

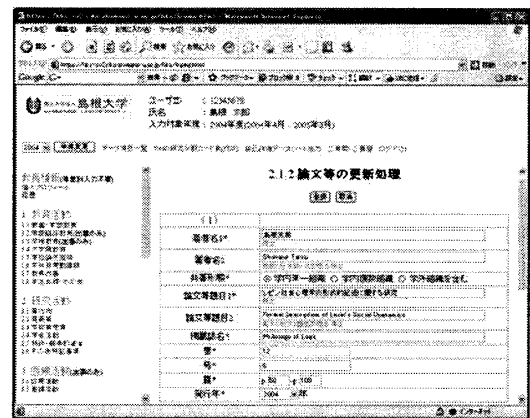


図2. 教員情報登録画面

5. おわりに

本稿では「島根大学評価情報データベース」構築について述べた。本システムは、実運用に供され、利用者のニーズに答えながら、外部評価、教員個人評価、学部の自己点検等、大学評価に対応した情報の蓄積・提供という目的を果たしている。

参考文献

- [1] 大学評価文化の展開, 川口昭彦, (独) 大学評価・学位授与機構, 2006
- [2] 島根大学評価情報データベース,
<http://hks-sv1.riko.shimane-u.ac.jp/>
- [3] 島根大学学術情報リポジトリSWANにおけるセルフアーカイビングの実際～大学評価情報データベース連携と登録支援機能を中心として～, 福山栄作, 清水直美, 中井陽子, 増子喜信, 情報管理 vol. 51, no. 4, p. 260-p. 271, 2008